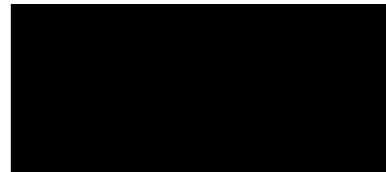
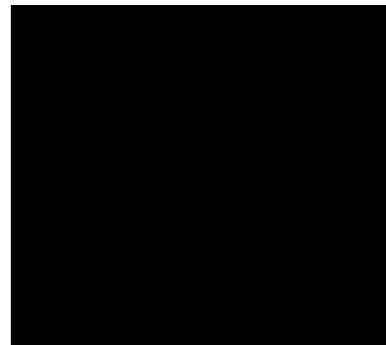


ばらで
いん



Седиментация



ノーチラスを移動の中継地点として利用したり、観光を目的に訪れる来訪者が使うための浴場はいくつかの個室に分けられ、それを借りる形式になっている。三人はまとめてひとつの湯殿を借りることにした。

その日本風の岩風呂には湯船の底に惑星の風景、そして天井には星々が投影されている。

「家族風呂になってるなら最初からそう言いなさいよね」

余計な恥をかかされたとしても言いたげな表情で、さっさと体を洗って泰然と湯船のへりに手を伸ばして湯を満喫するミカをねめつけながら、それに続くカチューシャは足の裏で湯の熱さを確認する。

「いろんな利用者に配慮されてるってことかな。こっちは別に男湯でも女湯でも構わないのだけど」

体にタオルを巻いているふたりとは違い、ミカは何もつけずに湯船に寝そべるように天井の星々を眺めている。

「小さい頃からノンナのお下がりでこういう格好だけど一応気にするの。というかあんたはノンナもいるのに気にしなさすぎ」

服を脱ぎ捨て男性的な要素を露わにしているミカを非難がましくねめつける。

「私は気にしていません。それにカチューシャだってエキシビジョンの打ち上げで普通に入ってたじゃないですか」

「それは、みんなが知ってて構わないって言うてくれたからだし、あそこには同じ子も何人かいたから！ 状況が違うのよ。勝手に他人の体を触るような子がいるから心配なの！」

赤面しながらまくしたてるカチューシャを見て、ノンナとミカはちらと視線を合わ

せて苦笑する。

その意味するところは異なるのかもしれないが。

「にしても熱いわ、水入れるわね」

照れ隠しなのか足の裏で湯の温度を確認していた力チューシャはふたりからの返答も待たずにカランを回して勢いよく水を注ぎ始め、そっとくるぶし、ふくらはぎ、タオルで覆われた太ももまでを湯に浸し、湯船の中で段になっていいる部分へ腰掛ける。その脚には必要以上の肉がついておらず、彼が無駄のない筋肉をつけたミカや柔らかな肉で覆われたノンナとは異なり、未発達な少年の相をまだ残していることを示していた。

「水を入れすぎです。それに、腰までじゃなくて肩まで浸からないと」

後から湯に入ってきたノンナは逆にカラ

ンを回すと、カチューシャの肩を押さえる。

「いいのよ。もう立派な隊長は卒業したんだから」

そう言って抵抗するものの、ノンナは慣れた手つきでそのままカチューシャを肩まですみこませ、自分も湯船に身を沈める。

「高校ではそうでしたが、これからは別の理由を考えないといけませんね」

表情の読めない顔のまま、彼女はそう眩しきもの思いに入ったのか目をうつすらと細める。

「伴侶としてふさわしく、かな？」

水音も静まりかけた湯殿にミカの静かな声が響くと、顔を半分まで湯に沈めていたカチューシャが泡を噴き出し、咳き込みながら立ち上がる。

「ば、ば、馬っ鹿じゃないの！ だいたい、カチューシャとノンナが一緒になるからっ

てそれに何の関係があるのよ？」

「確かに、生活の基準になる価値観の共有は共同生活の基盤ではあります」

表情ひとつ変えずノンナはそう返し、湯が気管に入ってしまったカチューシャを膝の上に乗せ、その背をさすりながら続ける。

「ですが、共存できる範囲でせめぎ合うのも、好ましい相手となら案外悪くありません」

無表情だが声は柔らかく、それを聞いたカチューシャはその顔を真っ赤にする。

「系統分岐型人類、ホモ・サピエンス・ゲルミニスらしい考えだね」

ミカは満天の星空を見上げて言う。ノーチラスの観測装置が捉えた小数点以下数秒前の輝きの中には、彼が数時間前に訪れていたダイダロス・スリーの光学ビーコンも見る事ができる。ホモ・サピエンス・サ

ピエンスが持つ可能性を人為的に向上させたホモ・サピエンス・ゲルミヌスに乗せ、千兆の希望として地球を旅立った船のひとつ。

「そんなんじゃないわよ。カチューシャとノンナはお風呂の温度くらいじゃ何ともならないくらい仲良しだったこと」

自信満々の顔で鼻を鳴らすカチューシャだが、何かが頭にひっかかったのか、表情を少しこわばらせる。

「そういえば、ミホーシャの戦車道はその目的にも適ってた。自覚はなかったみたいだけど」

「ホモ・サピエンス・ゲルミヌスの可能性を引き出し、世代をかけてその使い方を心のモジュールへ組み込んでいく。それも選択科目が目指すものですからね」

ノンナが膝に座らせたカチューシャの髪

に手櫛をかけながらそれを受ける。

「戦車道、忍道、仙道。どれも前世代人類ではできないことを行ない、拡張された可能性を引き出すために仕組まれたもの」

ミカが補う。その視線の先にあるのは、ダイダロスの光か。

ホモ・サピエンス・サピエンスが種としての黄昏を迎えつつあった時代、彼らはナノテクによって強度を増した炭素分子で構成されたアミノ酸と蛋白質を用いてヒトの物理的な強度を、遺伝子工学による神経系の改良で環境への適応性や意思の伝達を大幅に向上させた。そうしてホモ・サピエンス・サピエンスを継ぐべく人為的に生み出された種こそ、千兆の希望として宇宙へ播種され分岐と発展を期待されたはじまりの種、ホモ・サピエンス・ゲルミヌス。

「ケチケチしないで少しくらい詰め込んで

もよかったのに。自分たちも数十万年かけてようやく全部をものにしたから、怖かったんだろうけど」

カチューシャの表情は複雑である。彼女とて、前世代の人類が人為的な進歩を掴み取ろうと何度も痛い目を見た歴史は知っている。だが、彼らが託した可能性が迂遠であることも正直な感想なのだ。

「西住みほは我々の可能性を無意識に自覚しているのではないでしょうか。だから彼女は躊躇なく戦車から体を出すし、私たちの心が無茶だと直感してしまう作戦を行います」

「ノンナはミホーシャのことを随分評価してるじゃない」

少し眉を歪め、憮然とした表情を浮かべるカチューシャ。

「とは言っても、認めるものは認めるわ。」

ミホーシャは種の可能性を引き出す戦車道をしてた。夏休みに寄せ集めのチームで戦ったときもね」

「そうだね。何度か対戦したことがあるとはいえ、意思の疎通があそこまでうまくいったのは」

そこで三人は沈黙し、あるチームのことを思い描く。

「ま、アンツイオのお陰でもあるけど」

「それは否定しないさ。彼らには世話になった」

「それに加え、西住みほ、あるいは他の誰かが全体の共感能力を向上させた可能性は考慮すべきでしょう」

ノナナの言葉に、カチューシャは憂いを浮かべる。

「そういえば、大洗の戦車道はどうなのよ。ミホーシャが自分の戦車道を見つけても継

承されなきゃ意味はないわ」

ホモ・サピエンス・ゲルミヌスの可能性は世代を越え道として継承され、更新されていく。

「向こうの自動車部と遊んでるミッコから戦車道志望で志願する子も増えたと聞いたよ。しばらくは大丈夫じゃないかな」

「もっと言ってしまうれば彼女に関わった全員が影響を受けてしまったと言っても構わないでしょう」

それだけモジュールが分配されたと考えれば安心したのか、カチューシャは表情を少し柔らかくしつつも、ため息を吐く。

「問題はそれがどれだけの世代で惑星全体に伝わるかね。強くなった力を使いこなせば、人はもっと高みを目指せるのに」

「正解はひとつだけじゃないさ。他の学校や流派の戦車道、そうじゃない他の道でも、

同じようなところから世界を見ることができ
る人はいるかもしれない」

星々を見つめながら唄うようにミカは話
す。それをノンナが継ぐ。

「それが千兆の希望。系統分岐ですね」

可能性を求め異なる分岐を行ない発展し
た人類がお互いを許容できなくなったとき、
彼らはふたたび世代宇宙船を建造し、人間
狩猟機を連れて新たな星を目指す。その繰
り返しこそが、ホモ・サピエンス・サピエ
ンスからホモ・サピエンス・ゲルミヌスに
託された希望。

いつか、この宇宙の終焉も越えて進み続
ける未来を夢見て。

「だけど」

ぽつりとカチューシャが漏らす。彼らし
くない、少し震えた声。

「カチューシャは多分、もう戦車道をする

ことはないわ。これからはアストライアで忙しいだろうから」

「私も、戦車道は卒業でしょうね」

「三人とも離れることになるね。その戦車道を見た、後に続く子たちを残して」

それを聞いた力チューシャは湯船の湯を手にとって顔を洗い、立ち上がって宣言する。

「そうね、プラウダ高校の戦車道は続いていくわ」

そう言いつつ、赤らんだ顔のまま体をふらつかせ、すかさず立ち上がったノンナに支えられる。

「話しすぎて湯あたりしたじゃない。もう上がるわよ！」

「そうだね。そろそろ時間だ」

三人は揃って浴場を出て、脱衣場で体を乾かし服を着る。

「そういえば君たちはいつの便で来たのかな？ 試験に間に合う時間帯なら乗り合わせただけだ」

ミカの質問に、カチューシャは胸を張って答える。

「プラウダの技術力を舐めないことね。宇宙開発部のウラガンを借りてきたわ。頭を下げれば帰りは乗せてやらないこともないけど」

「カチューシャは私の膝の上でいいですかね」

「一言余計よ、ノンナ！」

そんなやり取りを見ながら笑みを浮かべ、ミカは言う。

「それじゃあ、お願いでしょうか。ふたりのためにも」

〈了〉